

こま

小川未明

青空文庫

赤地^{あかじ}の原^{はら}っぱで、三ちゃんや、徳^{とく}ちゃんや、勇^{ゆう}ちゃんたちが、輪^わになって、べいごまをまわしていました。

赤々^{あかあか}とした、秋^{あき}の日^ひが、草木^{くさき}を照^てらしています。風^{かぜ}が吹^ふくと、草^{くさ}の葉^は先^{さき}が光^{ひか}つて、止^とまっているキチキチばったが驚^{おどろ}いて、飛行機^{ひこうき}のように、飛^とび立^たち、こちらのくさむらから、あちらのくさむらへと姿^{すがた}を隠^{かく}したのでした。

けれど、一同^{どう}は、そんなことに気^きを止^とめるものもありません。熱心^{ねっしん}に、こまのうなりに、瞳^{ひとみ}をすえていました。

この時刻^{じこく}に、学^が校^{こう}の先^{せん}生^{せい}が、この原^{はら}っぱを通^{とお}ることがあります。みんなは遊^{あそ}びながらも、なんとなく、気^きにかかるのでありました。見^みつかれば、しかられやしないかと思^{おも}うのであるが、また、こんなことをしたつていいという考^{かん}えが、みんなの頭^{あたま}にもあつたのであります。

三人^{にん}が、夢^{むちゆう}中^{ちゆう}になつているところへ、

「おれも入^いれてくれないか？」と、ふいにそばから、声^{こえ}をかけたものがあつたので、びつくりして顔^{かお}を上げると、それは、黒眼^{くろめがね}鏡^{がね}をかけた紙芝^{かみしばい}居^いのおじさんでした。

「おれも仲間なかつに入れてくれよ。」と、おじさんは、遠慮えんりよしながら、いいました。

「おじさんも、べいをやるのかい。べいを持つてもいるの。」と、勇ゆうちゃんが、きました。

「ほら。」といって、おじさんは、ズボンのかくしから、光ひかったべいを出だして見みせました。

「角かくのケツトンだね。」と、徳とくちゃんも、三ちゃんも、たまたたように、おじさんのべいに目めを光ひからせました。

「おら、子供こどもの時分じぶんから、こまをまわすのが、大好きだいすなのさ。」

おじさんは、三人にんの間あいだへ割わつて入はいるとかがみました。そして、むしろの上うへを見みていたが、

「だれのだい、あのダイガンは？」

「あのベタガンは、三ちゃんのだよ。」

「おれは、あいつがほしいものだなあ。」と、黒眼鏡くろめがねのおじさんは、子供こどものように、三

ちゃんの大おおきなべいに見みとれています。

「おかしいなあ、大おおきななりをして、べいをするなんて……。。」と、徳とくちゃんは、おじさんの顔かおを見みて、げらげら笑わらい出だしました。

「なにが、おかしいんだい。おら、子供こどもの時分じぶんから、こまは好きすなんだよ。それは、こんなのでなくて、木きのこまに、鉄てつの胴どうをはめたんだ。その鉄てつの厚あつみが広ひろいのほどいいとした

もんだ。あの、三ちゃんのダイガンを見ると、おれの持つていた、鉄胴てつどうのこまを思い出すよ。」と、おじさんは、いいました。

「その鉄てつの胴どうをはめた、こまをどうしたの？」と、勇ゆうちゃんが、聞ききました。

「こつちへくるときに、友ともだちにやってしまった……。なにしろ、十五の暮くれに出てきたんだものな。あれから十年ねんも故郷こきようへ帰かえらないのだ。」

「それで、おじさんは、こつちへきてても、べいをしていたのかい。」

「じょうだんな、そんな暇ひまがあるかい。小僧こそうをしたり、職しよつこう工こうになったり、いろいろのことをしたのさ。この商売しょうばいをするようになって、昔むかし、こまをまわしたことを思い出しで、ときどきべいをするが、おもしろいなあ。」と、おじさんは、子供こどもといっしよに遊あそぶのが、なにより楽たのしみだといわぬばかりに、にこにこしていました。

「さあ、やろうよ。」

「よしきた！ しんけんべい。」と、おじさんが、叫さけびました。

カチンと、みんなが、手てから繰くり出だした、鉄砲てつぱうだまのようなべいは、たがいにはじき合あって、火花ひばなを散ちりました。おじさんのべいは、なかなか強つよく、輪わを描えがいては、うなりながら、三人にんのべいをはね飛とばしてしまいました。

「おじさんの角は、すげえな。」と、三ちゃんは、白目を、くるとさせました。

「そうさ。お宮の石垣や、コンクリートの道で、みがいたんだものな。このべいには、だれにも負けないという信念が入っているのだ。天下無敵というやつさ。」

黒眼鏡のおじさんは、三ちゃんのダイガンを負かすと、てのひらでなでまわして、喜びました。

「みんな、あすこの草の上へいつて、寝転ぼうよ、あめをやるから。」

おじさんは、そういつて、自転車についている箱から、あめを取り出してきて、みんなに分けてくれました。

仰向けになって、高らかな空を見上げると、しみじみと秋になったという感じがしました。小羊のような、白い雲が、飛んでいくのを見送りながら、三人は、思い思いに、お

じさんの話を聞いていました。

「村に女の子で、お時といつて、おれとおなじ年の子があつて、こまもまわせば木登りも上手だった。隠れんぼをすると、お時は、ぞうりをふところに入れて、家の前にあつた大きなしいの木に登ったものだ。風があつて、枝が、ゆらゆら揺れているのに、てっぺんまで上るのだから、だれも見つけたものがなかったのだ。男の子とけんかをして、泣い

たことのない勝ち気な子だったが、どうしたろうか。」

子供たちは、もうおじさんの話を聞いていませんでした。

「おじさん、また明日おいでよ。こんどは、僕が敵討ちをして、おじさんの角を負かしてしまふから。」と、三ちゃんがいきました。

「ああ、いいとも。みんな待つていな。」と、黒眼鏡のおじさんは、帰っていききました。その夜、月は、みがきたての鏡のように明るかったです。昼間子供たちの遊んだ、赤地の原には、虫の音が、いっぱいでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「小学四年生」

1937（昭和12）年10月

※初出時の表題は「独楽」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こま

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>